

ロマンス語の tough 構文について

イスパニア語を中心に

Sobre la construcción “tough” en las lenguas románicas, especialmente en el español

福 嶋 教 隆

Noritaka FUKUSHIMA

I 序 論

本稿で言う tough 構文とは、不定詞やそれに準ずる動詞形の意味上の目的語が文主語となった形容詞構文を指す。¹⁾そのイスパニア語における例として(1)があげられる。

(1) Este libro es fácil de leer.

この構文の研究は、とりわけ英語の生成文法学者によって著しい進歩を遂げた。まず Chomsky (1964: 61-62)が(2a, b)という2つの文を対比させた。同書によれば表層構造では、これら両文の John は等しく文主語として機能しているが、基底構造では(2a)の John は please の目的語、(2b)の John は主語、という違いがあるという。すなわち(2a)は tough 構文だが、(2b)はそうではない訳である。

(2) a. John is easy to please.

b. John is eager to please.

続いて Postal (1971: 27-31)が概略(3a)から(3b)を導くような変形を提案し、tough 移動変形と名づけた。関与する形容詞に「難易」を表わすものが多いところから、その代表例として tough という語を選んだのである。tough 構文の名もここに由来する。

(3) a. [It [for Tony to hit Jack]] was difficult.

b. Jack was difficult fot Tony to hit.

その後の研究により、英語における tough 構文のさまざまな特性が明らかになった。例えば(4a)に見られるように、不定詞の意味上の主語を文主語にすることは許されず、従って(4b)のような受動の tough 構文は成立しにくいことが指摘された。²⁾

(4) a. *John is difficult to run fast. (井上, 1976: 145)

b. *John is easy to be convinced. (Montalbetti et al., 1982: 350)

本稿では、このような英語についての研究成果を手掛かりとして、ロマンス語、特にイスパニア語の tough 構文の特徴を考察する。なかんずく受動 tough 構文の可否、再帰受動 tough 構文の可否、および形容詞に後接する前置詞の種類に着目してみたい。

II イスパニア語の tough 構文

2.1 イスパニア語の tough 構文の研究には、伝統文法に基づく Bello (1847: § 1105), Gili Gaya (1951: § 143), Real Academia (1973: 484) などがある。また最近では生成文法の影響を受けて Aissen

et al. (1976), 出口 (1979), D'Introno (1979: 135-141), Montalbetti et al. (1982, 1983a, b), Bosque (1983), González (1985) などの説も発表されている。これらのうち受動および再帰受動の tough 構文に言及しているものを、以下の検討対象とする。

まず Bello は (5a, b) において再帰受動の *se* の付いた表現も認めている。但し *se* のない場合の方が一般的であるとする。Gili Gaya は (5c, d) の左項は右項に等しいとし、更に (5e) のような再帰代名詞の使用も認めている。Montalbetti et al. は、能動 tough 構文 (5f) と並んで受動 tough 構文 (5g) が存在するのがスペイン語の特徴であるとの前提にたって議論を進めている。

- (5) a. (Una cosa es) buena de comer(se).
b. (Una cosa es) digna de notar(se). (以上 Bello, 1847: § 1105)
c. río fácil de atravesar = río fácil de ser atravesado
d. digno de alabar = digno de ser alabado
e. cosa digna de verse (以上 Gili Gaya, 1951: § 143)
f. Juan es fácil de convencer.
g. Juan es fácil de ser convencido. (以上 Montalbetti et al., 1982: 349-350)

一方 D'Introno は、(6a) の如き受動 tough 構文は、容認する人もいるかも知れないが、自分を含めた大多数の母語話者にとっては非文法的である、と述べている。González も (6b) のような文は、許容する人と、そうでない人がいるという。³⁾ 更に Bosque は (6c) のように受動 tough 構文が可能な場合と、(6d~f) のように不可能な場合とがあると指摘している。

- (6) a. Estos libros son fáciles de ser leídos. (D'Introno, 1979: 140)
b. Tu poema es posible de ser publicado en mi revista. (González, 1985: 30)
c. digno de ser alabado
d. *difícil de ser arreglado
e. *agradable de ser visto
f. *largo de ser contado (以上 Bosque, 1983: 10)

以上のように受動、再帰受動の tough 構文の可否については、意見が分かれている。そこで現代スペイン語の tough 構文の実況を調べるため、筆者は第 1 に小説、戯曲、新聞、雑誌などから 130 例の文例を収集した。第 2 に 17 名の母語話者に例文を示し、その可否を問うた。その国籍はスペイン 10、ペルー 2、コスタリカ、コロンビア、チリ、アルゼンチン、フィリピン (14 才からスペインに在住) 各 1、年齢は 20~50 才台である。以下にその結果を記す。⁴⁾

2.2 収集した 130 例の tough 構文のうち、能動形の不定詞を持つ事例は 125、受動形は 1 (= (7a))、再帰代名詞の伴うものは 4 例 (= (7b~d)) であった。また (7f, g) の文法性について先述の 17 名の母語話者に問うたところ、(7f) が自然な文だとする者 6 名、やや不自然だとする者 8 名、明らかに不自然だとする者 3 名であった。(7g) では、同じく 3 名、3 名、11 名の順であった。

- (7) a. Usted es digna de ser amada (M. Ciges Aparicio, *Del hospital*)
b. la vida sabrosa y digna de vivirse (R. Pérez de Ayala, *Belarmino y Apolonio*)
c. Este disco es digno de coleccionarse. (*Life en español*, 1958.2.24)

- d. el escritor las (= situaciones ya planteadas) considera felices y dignos de repetiries
(*Insula*, 1964. 10)
- e. mis relaciones con María Luisa, las que consideraba peligrosas y fáciles de convertirse en
un escándalo (R. Alberti, *La alborada perdida*)
- f. Juan es fácil de ser engañado.
- g. Este libro es difícil de entenderse.

これらの資料によれば、スペイン語のtough構文では、受動形式や再帰受動形式はあまり好まれないということになる。しかも例外的に受動、再帰受動の形をとっている(7a~e)のうち、4例までがdignoという形容詞を用いている点に留意すべきであろう。⁵⁾ 2.1で引用したBelloやGili Gayaが、受動、再帰受動tough構文の例として(5b, d, e)のようにdignoを有する文をあげ、またBosqueがdignoは他の形容詞と異なり受動tough構文を成立させ得ると述べているが、それと筆者のささやかな調査の結果とが、期せずして一致した訳である。従ってdignoを特例とみなせば、⁶⁾ 受動、再帰受動tough構文は、文の受け取り手の立場としては或る程度容認されるものの、実際の使用例はごく稀であるということになる。⁷⁾

2.3 用例の収集は前置詞deを伴うものに限定したが、前置詞paraを伴う文の中にも(8)のように、不定詞の意味上の目的語が文主語となった例がある。以下この種の構文を、擬似tough構文と呼ぶことにする。

- (8) a. El silencio aquel era demasiado hermoso para romperlo así, (J. Ferrer Vidal, *La tapia del solar*)
- b. ———¿Qué es lo que pretende saber de mí?
———Sólo una soca. Pero demasiado íntima para hablar delante de testigos. (A. Casona, *La barca sin pescador*)

この例で分かるように、擬似tough構文では、主語と同一指示の直接目的格代名詞が現れる場合と現れない場合とがある。これに対して本来のtough構文は、この種の代名詞をとることは、ほとんどない。収集例のうち124例が何ら代名詞を従えない文、4例が再帰代名詞を従える文(これは再帰受動tough構文(7b~e)として既出)、そして2例が人称代名詞を従える文(=(9a, b))であった。また代名詞を添えたtough構文(9c)についての文法性の判断を求めたところ、自然だとする者4名、やや不自然だとする者5名、全く不自然だとする者8名という結果を得た。一方、代名詞を添えた擬似tough構文(9d)については、1名のみ不自然だと答え、他の16名は全員、自然な文であるとの返答だった。⁸⁾

- (9) a. porque esas cosas no se piensan, son más fáciles de gafarlas (J. Cela Trulock, *Blanquito, peón de brega*)
- b. un hombre alterado siempre es más fácil de conducir, de pescarle en contradicciones, de hacerle pronunciar alguna idiotez irreparable. (M. Benedetti, *Montevideanos*)
- c. Esta teoría es difícil de explicarla.
- d. La niña es aún pequeña para llevarla a los pagos.

以上の結果を1つの根拠として用いて、(10)のような分析が考えられるかも知れない。即ちtough構文

における「形容詞+⁹⁾ +不定詞」は、1種の複合形容詞句(Adjective Phrase)ともいべき構成素を形成するのに対し、擬似 tough 構文の場合は、そのような構成素が存在せず、副詞的に働く「para+不定詞+目的格代名詞」という前置詞句(Prepositional Phrase)があるとする見地である。

- (10) a. Este libro es [AP difícil de leer].
 b. Este libro es demasiado difícil [pp para leerlo].

III ラテン語およびロマンス語の tough 構文

3.1 冒頭の例文(1)に対応する古典ラテン語の文は、(11a)のようになるであろう。ここに見られる lectu なる形は、目的分詞(スピーヌム)奪格形(または与格形)¹⁰⁾である。しかしこの動詞形態の用法は限られていて、頻繁かつ自在に使われることはなかった。¹¹⁾そこで俗ラテン語においては、この形式に代わって「ad+動名詞対格形」または「(ad+)不定法」が用いられるようになった。¹²⁾(11b,c)を参照。

- (11) a. Hic liber facilis est lectu.
 b. Hic liber facilis est ad legendum.
 c. Hic liber facilis est (ad) legere.

イスペイン語においては、現今の tough 構文とほとんど変わらない表現が、ごく古くから存在していた。即ち俗ラテン語期の前置詞 ad に代わって de (< Lt. de) が用いられるのである。(12a,b)を参照。この構文は絶えることなく受け継がれて今日に至っている。(12c~g)参照。受動形の例(12b,d,g)は、現代語と同じく digno を伴う文か、それと類義の形容詞 mereçiente を伴う文である。

- (12) a. tierra trabaiosa de conquerir (Alfonso X, *Primera crónica general*, 13c)
 b. mereçiente era de seer fostigado (G. de Berceo, *Milagros de Nuestra Señora*, 13c)
 c. muchas maneras de yras largas de escrevir e dezir aquí (A. Martínez de Toledo, *El Arcipreste de Talavera (Corvacho)*, 15c)
 d. digna de ser quemada biva (*Ibid.*, 15c)
 e. este lenguaje de espíritu es tan malo de declarar (Sta. T. de Jesús, *Vida*, 16c)
 f. son dignísimas de ser leídas (A. de Morales, *Los quince discursos*, 16c)
 g. me obliga a que crea lo que tan difícil es de averiguar (A. Fernández de Avellanoda, *Segundo tomo del ingenioso hidalgo Don Quixote*, 17c)

3.2 現代フランス語の tough 構文は、(13a)に見られるように前置詞 à (< Lt. ad) を用いる。¹³⁾受動 tough 構文は許容されない。¹⁴⁾再帰受動 tough 構文は、好ましくないとする学説と、正規の用法とみなす学説があるという。(13b,c)参照。¹⁵⁾

- (13) a. Ce livre est facile à lire.
 b. *Ce livre est facile à être lu.
 c. ?Ce livre est facile à se lire.

次にイタリア語の tough 構文の前置詞は、a, da (< Lt. de + ab) の2種類がある。(14a)参照。受動形はあまり好まれない。¹⁶⁾再帰受動形は、前置詞が a の場合、普通に用いられる。¹⁷⁾(14b,c)参照。

- (14) a. Questo libro e facile { a, da } leggere.
 b. ?Questo libro e facile { a, da } essere letto.
 c. Questo libro e facile { a, da } leggersi.

またカタルニア語は、(15a)のように前置詞deを用いてtough構文を作る。受動形は許されないが、再帰受動形はイタリア語と同様、認められるようである。¹⁸⁾(15b,c)参照。

- (15) a. Aquest llibre és fàcil de llegir.
 b. ?Aquest llibre és fàcil de ésser llegit.
 c. Aquest llibre és fàcil de llegir-se.

ポルトガル語においても、前置詞はdeである。(16a)参照。受動形の使用が可能で、再帰受動形も或る程度、許容される。¹⁹⁾(16b,c)参照。また非人称不定詞を用いるべきだとされているが、人称不定詞を用いることも全く不可能ではないようである。²¹⁾(16d)参照。この場合も受動形が現れうる。(16e, f)参照。

- (16) a. Este livro é fácil de ler.
 b. Este livro é fácil de ser lido.
 c. ?Este livro é fácil de ler-se.
 d. Estes livros são fáceis de lerem.
 e. Estes livros são faceis de serem lidos.
 f. ?Estes livros são fáceis de se lerem.

ガリシア語のtough構文も、前置詞deをとる。受動形が認められ、人称不定詞の使用も、受動形の場合は可能のようである。²²⁾(17)参照。

- (17) a. Este libro é fácil de ler.
 b. Este libro é fácil de ser lido.
 c. ?Este libro é fácil de lerse.
 d. *Estes libros son fáciles de leren.
 e. Estes libros son fáciles de seren lidos.
 f. ?/*Estes libros son fáciles de lerense.

最後にルーマニア語も、前置詞deを用いてtough構文を作る。(18a)参照。しかし今まで見てきた諸言語と異なる点が2つある。第1に前置詞に続く動詞は、不定詞ではなく過去分詞男性単数形である。学者によっては、この形態を目的分詞と考え、ラテン語のそれに由来すると説く人もいる。²³⁾第2に greu, ușorなどの形容詞は、tough構文の文頭になつ語の性数の如何にかかわらず、常に男性単数形にとどまる。²⁴⁾従って(18a)を例にとって言うならば、この文はEste ușor de citit cartea aceasta.と理解されるべきであって、その後置主語句の中の要素の一部が文頭に置かれているのだと考えることもできる。²⁵⁾なお受動および再帰受動tough構文は許されないようである。²⁶⁾(18b,c)参照。

- (18) a. Cartea aceasta este ușor de citit.
 b. *Cartea aceasta este ușor de a fi citită.
 c. *Cartea aceasta este ușor de a se citi.

3.3 本節の観察を図表に整理すると、(19)のようになる。即ち古典ラテン語に存在した目的分詞は、恐らくルーマニア語を除いて、他のロマンス語には受け継がれなかった。俗ラテン語の「ad+動名詞」、「(ad+)不定詞」のうち、後者が広く継承された。但し前置詞をdeに置きかえた言語が多い。イタリア語はad型の言語とde型の言語の中間に位置していると言えよう。

(19)ラテン語、ロマンス語tough構文の前置詞、受動形、再帰受動形

古典ラテン語	俗ラテン語	古いロマンス語	現代語	受動形	再帰受動形
目的分詞	----- X	-- ? ----	ルーマニア語	*	*
ad + 動名詞	---- X		ガリシア語	OK	?
			ポルトガル語	OK	?
		de + 不定詞 —	イスパニア語	?	?*
			カタルニア語	?	OK
		de + ab + 不定詞 —	イタリア語	?	OK
ad + 不定詞		à + 不定詞 —	フランス語	*	?

IV 結 論

以上の考察をまとめ、次の2点をもって本稿の結論とする。

(ア) 本稿で扱ったロマンス諸語のうち、ポルトガル語とガリシア語は受動tough構文を許し、イタリア語とカタルニア語は再帰受動tough構文を認める。そしてフランス語、イスパニア語、ルーマニア語は、どちらの構文もとりに難い。

(イ) 本稿で扱ったロマンス諸語は、tough構文を作るに際し、到達点を表わす前置詞をとるものと、起点を表わす前置詞をとるものに分かれる。前者はフランス語、後者はイスパニア語、カタルニア語、ポルトガル語、ガリシア語、ルーマニア語である。イタリア語は、この2つの傾向の接点に位置する。またイスパニア語には、前置詞deによるtough構文の他に、前置詞paraによる擬似tough構文がある。

なお今後の課題としては、受動または再帰受動のtough構文の成立のしやすさは、一般の受動文、再帰受動文の使用領域の広さと、何らかの相関関係を有しているかを調べることなどが挙げられよう。

(1985. 9)

注

0) 本稿は1985年5月25日、早稲田大学にて開かれた日本ロマンス語学会第22回大会での口頭発表に基づくものです。貴重な御助言を賜わった先生方ならびにインフォーマント調査に御協力下さった方々に厚く御礼申し上げます。但し、本稿における一切の誤りの責任が筆者にあることは、言うまでもありません。

1) 厳密には、不定詞句を主語にした文との対応関係を持つ場合のみtough構文と呼び、そのような対応の成立しない場合はpretty構文と呼んで区別すべきところ(河野、1984参照)だが、本稿の議論には大きな影響がないと思われるので、以下ではこの両者を区別せず、ともにtough構文と称することにする。

- 2) 安井 et al. (1976: 231)によれば、受動tough構文も稀に見られるという。なお「受動tough構文」という表現には自己矛盾があるが、便宜上、この名称を用いることにする。
- 3) (6b)は形容詞にも多少、問題がある。英語では、impossibleはtough構文を作ることができるがpossibleには作れないことが知られている。赤塚(1979)参照。スペイン語のimpossible, posibleについてBosque(1983: 11)が同様の指摘をしている。筆者の集めた130の用例にimpossibleの現れる文は8例含まれているが、possibleを用いた例は皆無だった。
- 4) 詳細は拙稿(to appear)を参照。調査では殊にGermán Arce先生(関西外大)、José Fernández先生(大阪外大)にお世話になった。
- 5) また(7d)についてSkydsgaard(1977: 644)は「誤用である」と述べている。
- 6) なお英語でdignoに相当するworthは、tough構文を作らない。福安(1984)を参照。
- 7) 一般に「コンピュータ+過去分詞」という形式による受動構文の使用は、スペイン語の方が英語よりも制限されている。Schulz(1982: 28-29)参照。従って英語で許されない受動tough構文が、スペイン語でも認められないのは、自然な帰結であると考えられる。
- 8) 興津(1972: 44)に次の対が例としてあげられている。
- (i) Esto es demasiado difícil de entender.
- (ii) Esto es demasiado difícil para entenderlo.
- 9) Nanni(1978)は、英語において同様の見解を主張している。
- 10) 元来、与格であったのが、奪格に変わったと言われている。Gildersleeve et al.(1895: § 436), Bassols de Climent(1956: § 428)を参照。
- 11) 泉井(1952: 521), 片岡(1982: 252)。またGildersleeve et al.(1895: § 436)によると、目的分詞奪格形を最も多用したCiceroの作品でも、この形式は24種の動詞にしか見られないし、Caesarに至ってはfactuとnatuの2種しか使用していないという。
- 12) Elcock(1960: 111), 国原(1975: 97, 120)。またVäänänen(1967: § 324)を参照。
- 13) Elcock(1960: 111)参照。なおフランス語tough構文を詳しく論じた研究は、筆者の知る限りでもKayne(1975), Picabia(1978), Ruwet(1978), Huot(1981), 林(1984), 三藤(1984), Legendre(1985)など数多い。
- 14) 林(1984)によると、(iii)の文法性を4人のフランス人に問うたところ、全員から非文法的との回答を得たという。またLegendre(1985: 74)は(N)を非文として(13b)の非文の印は、これらに基づいて筆者が付したものである。
- (iii) *Cette version est facile à être traduite.
- (iv) *Ce livre est facile à être lu par Marie.
- 15) 朝倉(1955: 154)。この状況を表わす意味で、(13c)に?を付けた。
- 16) (14)の文法性の判断はPino Marras先生(天理大)に負う。またBelletti(1982: 19)は(V)を非文だとしている。
- (v) *Certe idee sono difficili da essere sostenute in circostanze del genere.
- 17) Regula et al.(1965: 234)。一方Belletti(1982: 18)は、前注の例文(V)のessere sostenuteをsostenersiと置きかえると文法的になると述べている。

- 18) (15)の文法性の判断は Angel Ferrer Casals 先生(京都外大)に負う。なお Yates (1975: 194) は次の例をあげている。
- (vi) La teoria és difícil d'entendre.
- 19) Sten (1952: 210)。(16a~c)の文法性の判断は、ブラジル御出身の石川清雄先生(天理大)に負う。また次のような受動、再帰受動tough構文の用例があった。
- (vii) o trabalho ainda é fácil de ser encontrado (*Hispania*, 1984. 5, p.279).
- (viii) Esse fato é fácil de compreender-se, (S. da Silva Neto, *Introdução ao estudo da língua portuguesa no Brasil*, p.59)
- 20) Teyssier (1976: 233), Chuha et al. (1984: 483)。
- 21) (17d~f)の文法性の判断は Sônia Maria Bibe-Luyten 先生(大阪外大、ブラジル)に負う。また Sten (1952: 210-211) は次のような人称不定詞のtough構文の用例をあげている。順に能動、受動、再帰受動形をとっている。但しdignoを用いた文が多い。
- (ix) Dois tinha eu há dias, dignos de acompanharem a minha prima (Camilo Castelo Branco, *Amor de perdição*)
- (x) exemplos dignos de serem notados (J. Leite de Vasconcelos, *Opúsculos I.*)
- (xi) posto que achassem lindas de se verem as flores (C. Castelo Barnco, *Estrelas funestas*)
- なおCunha et al. (1984: 483)には、tough構文を作る形容詞の例として fácil, bom, raro と並んで possível があげられているが、事実であろうか。既出の注3を参照。
- 22) (17)の文法性の判断はGuillermo Rojo, Francisco García Gondar 両先生(Santiago de Compostela 大), Paz Prieto Nogueira先生(愛知県立大)に負う。(17f)について初めのお2人が「?」、Prieto先生が「*」とされた他は、判断が一致していた。但し García Gondar (1978: 133), 浅香 (1984)によると、人称不定詞のtough構文の実例はほとんどないようである。
- 23) Grandgent (1907: §103), Elcock (1960: 110), 片岡 (1982: 252)。また伊藤 (1982: 99-100) 参照。
- 24) Lombard (1974: 304)。同書によれば ușor, greu は常に不変化だが、bun, vrednic は主語と性数一致を行い、imposibil はこの2傾向の境界線上にあるという。また ușor, greu の場合でも性数一致を行うルーマニア人もいるが、好ましくないとされている、とも述べられている。
- 25) Lombard (1974: 305)。
- 26) (18)の文法性については伊藤太吾先生(大阪外大)に御指導を乞うた。(18a)の citit の態を変化させるようなことはできないので、(18b, c)は不定詞の受動形、再帰受動形を用いた文である。

参 考 文 献

- Aissen, J. et al. (1976): 'Clause reduction in Spanish', *Proceedings of the Second Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp. 1-30.
- 赤塚紀子(1979): 'Why tough-movement is impossible with possible', *Papers from the Fifteenth Regional Meeting of Chicago Linguistic Society* (以下CLS 15と略), pp.1-8.
- 浅香武和(1984): 'Empleos del infinitivo personal en gallego moderno', *Lingüística Hispánica* 7,

- 関西スペイン語学研究会、pp. 1-21.
- 朝倉季雄(1955):『フランス文法事典』、白水社。
- Bassols de Climent, M. (1956, 1983⁷): “Sintaxis latina”, Consejo Superior de Investigaciones Científicas, Madrid.
- Belletti, A. (1982): ‘Morphological passive and pro-drop: the impersonal construction in Italian’, *Journal of Linguistic Research* 2: 4, Indiana University, pp. 1-34.
- Bello, A. (1847, 1970): “Gramática de la lengua castellana”, Sopena Argentina, Buenos Aires.
- Bosque, I. (1983): ‘El complemento del adjetivo’, *Lingüística Española Actual* 5: 1, Instituto de Cooperación Iberoamericana, Madrid, pp. 1-14.
- Chomsky, N. (1964): “Current issues in linguistic theory”, Mouton, The Hague.
- Cunha, C. et al. (1984): “Nova gramática do português contemporâneo”, João Sá da Costa, Lisboa.
- 出口厚実(1979): ‘The syntax of direct objects in Spanish’, *Lingüística Hispánica* 2, pp.45-62.
- D’Introno, F. (1979): “Sintaxis transformacional del español”, Cátedra. Madrid.
- Elcock W. D. (1960): “The Romance languages”, Faber & Faber, London.
- 福安勝則(1984): 「Worth 構文の特性について」、英語学27, 開拓社、pp.41-58。
- García Gondar, F. (1978): “O infinitivo conxugado en galego”, Universidad de Santiago de Compostela.
- Gildersleeve, B. L. et al. (1895³, 1982): “Latin grammar”, Macmillan Education, London.
- Gili Gaya, S. (1951): “Curso superior de sintaxis española”, Bibliograf, Barcelona.
- González, N. (1985): ‘Object to subject raising in Spanish’, *Linguistic Notes from La Jolla* 13, University of California, San Diego, pp.25-52.
- Grandgent, C. H. (1907), F. de B. Moll 訳(1970): “Introducción al latín vulgar”, Consejo Superior de Investigaciones Científicas, Madrid.
- 林 博司(1984): ‘La construction “tough” en français’, 関西言語学研究会第9回大会口頭発表。
- Huot, H. (1981): “Constructions infinitives du français”, Droz, Genève.
- 井上和子(1976):『変形文法と日本語(上)』、大修館。
- 伊藤太吾(1982):『ルーマニア語入門』、泰流社。
- 泉井久之助(1952):『ラテン広文典』、白水社。
- 片岡孝三郎(1982):『ロマンス語歴史文法』、朝日出版社。
- Kayne, R. S. (1975): “French syntax”, MIT, Cambridge, Massachusetts.
- 河野継代(1984):「英語の‘pretty’構文について」、言語13: 4, 大修館、pp. 108-116。
- 国原吉之助(1975):『中世ラテン語入門』、南江堂。
- Legendre, G. (1985): ‘Object to subject raising, reflexive passive, and 3 to 2 advancement in French’, *Linguistic Notes from La Jolla* 13, pp. 69-95.
- Lombard, A. (1974): “La langue roumaine, une présentation”, Klincksieck, Paris.
- 三藤 博(1984):「フランス語の à + 不定詞構文」、関西言語学研究会第9回大会口頭発表。

- Montalbetti, M. et al. (1982): 'Three ways to get Tough', *CLS* 18, pp.348-366.
- (1983a): 'On certain tough differences between Spanish and English', *Proceedings of ALNE 13 / NELS 13*, University of Massachusetts, pp. 191-198.
- (1983b): 'Tough constructions and θ -criterion', *Proceedings of the Thirteenth International Congress of Linguists*, pp.469-472.
- Nanni, D. L. (1978): "The *easy* class of adjectives in English", University of Massachusetts 博士論文.
- 興津憲作 (1972): 『中級イスペイン語文法』、創元社。
- Picabia, L. (1978): "Les constructions adjectivales en français", Droz, Genève.
- Postal, P. M. (1971): "Cross-over phenomena", Holt, Rinehart and Winston, New York.
- Real Academia Española (1973): "Esbozo de una nueva gramática de la lengua española", Espasa-Calpe, Madrid.
- Regula, M. et al. (1965): "Grammatica italiana descrittiva", Francke, Bern.
- Ruwet, N. (1978): 'Note sur la "montée de l'objet"', *Studies in French Linguistics* 1: 1, Indiana University, pp. 95-113.
- Schulz, A. (1982): "Theoretical approaches to the passive in Spanish", Cornell University 博士論文.
- Skydsgaard, S. (1977): "La combinatoria sintáctica del infinitivo español", Castalia, Madrid.
- Sten, H. (1952): 'L'infinitivo impessoal et l'infinitivo pessoal en portugais moderne', *Boletim de Filologia* 13, Centro de Estudos Filológicos, Lisboa, pp. 83-142, 201-256.
- Teyssier, P. (1976): "Manuel de langue portugaise", Klincksieck, Paris.
- Väänänen, V. (1967): "Introduction au latin vulgaire", Klincksieck, Paris.
- 安井 稔 et al. (1976): 『現代の英文法 7、形容詞』、研究社。
- Yates, A. (1975): "Catalan", Hodder and Stoughton, London.
- 拙稿 (to appear): 『イスペイン語の tough 構文について』、神戸外大論叢 36、神戸市外国語大学。